



原著論文 (Original Article)

# 台湾人アイデンティティ再考<sup>1)</sup>

## ——複線径路等至性モデリングを用いて——

市川 章子

(一橋大学大学院 言語社会研究科博士後期課程)

### Reconsider about Taiwanese Identity by using Trajectory Equifinality Modeling (TEM)

ICHIKAWA Akiko

(Graduate School of Language and Society, Hitotsubashi University)

The aim of this study is to analyse the life of a Taiwanese-born woman raised in a Japanese region which did not provide classes for learning Japanese (as a second language), employing Trajectory Equifinality Modeling (TEM). While having analysed the data in this study, firstly the researcher created a TEM diagram. The interview data was analysed, focusing on TEM's conceptual aspects: which are Equifinality Point (EFP), Polarized Equifinality Point (P-EFP), Bifurcation Point (BFP), Social Direction (SD), Social Guidance (SG), Three Layers Model of Genesis (TLMG), Value Transformation Moment (VTM), Irreversible Time and Clover Analysis. After this, adopting Clover Analysis (Sato, 2015b), the researcher divided the research data into five categories, as follows: 1. Future Oriented Promotional Imagination (FOPI), 2. Future Oriented Restrain Imagination (FORI), 3. Past Oriented Promotional Imagination (POPI), 4. Past Oriented Restrain Imagination (PORI) and 5. Core Imagination (COIM). The analysed data shows how the Taiwanese-born woman's identity has changed, which was that the experiences of being bullied and banned from speaking her native tongue prevented her from understanding her identity, and she gradually came to be able to see her identity through reading the literature related to her mother country. Not only this, the results in this study would imply that there are some deep connections between register of using individuals' mother tongue and their Future Oriented Promotional Imagination. Furthermore, the analysis of the data would suggest how Clover Analysis (Sato, 2015b) helps one to analyse the details of the life stories of people having crossed the border.

本研究の目的は、台湾で生まれ日本の外国人散在地域で子ども時代を過ごし定住者となった台湾人女性のライフストーリーについて複線径路等至性モデリング (Trajectory Equifinality Modeling: 以下 TEM) を用いて分析することである。インタビューデータは、TEM の概念である EFP, P-EFP, BFP, SD, SG, TLMG, VTM とクローバー分析を中心に分析した。TEM 図を描いた後、Clover Analysis (サトウ, 2015b) に基づき、未来志向促進的想像、未来志向抑制的想像、過去志向促進的想像、過去志向抑制的想像に Core Imagination (中核の想像) を加え五つに分類した。結論として、幼少期から家庭でも学校でも母語の使用を禁止され、差別体験からアイデンティティの危機に陥りながらも、自己のルーツとなる地域について書かれた文学作品を通してアイデンティティを取り戻す過程が描かれた。本研究での試みから、越境する人々のライフストーリー分析において、「クローバー分析」の採用可能性の一断面が示された。

**Key Words** : Identity, Taiwanese, Crossing the border, Trajectory Equifinality Modeling, Clover Analysis

キーワード : アイデンティティ, 台湾人, 越境, 複線径路等至性モデリング, クローバー分析

1) 本研究は、横浜国立大学大学院教育学研究科に提出した修士論文の一部であり、2015年度異文化間教育学会第36回大会で発表した。クローバー分析の箇所は、2016年度日本質的心理学会第13回全国大会ワークショップに発表したものである。

## 1. 課題設定と研究の目的

東アジアで初めて、女性リーダーが誕生した台湾では、1990年以降「教育の改革」「社会運動」などが進み社会変革が目まぐるしい。今日では、同性愛作家のカミングアウトがなされ、「多様性」の受入が最も進んでいる社会の一つといえる。1985年に村上春樹の作品が頼明珠によって特集が生まれ、文学作品を通して日本への関心が高い地域である（藤井，2011）。日本の統治時代には、「日本語」が国語として教育がおこなわれていた。若林（1997）は、台湾の人々が用いる言語について三つに分類している。一つ目は中華民国の国語である中国普通語で、二つ目はそれぞれのエスニック・グループの母語、三つ目は「日本教育」を受けた世代が話す日本語である。ここでの「日本教育」は、先述した日本の植民地統治期である1895年から1945年の間に行われた教育を指す。

垂水（1992）は、日本の台湾統治について日本語教育を通して台湾人アイデンティティを破壊していったと述べ、このことが近年勢いを増す日本語教育においても忘れてはならない歴史の負債であると述べている。日本における台湾人の国籍表記に関する法的問題について研究した清河（2007）は、アイデンティティについて、「心情的なものであり、事実的な根拠や法的な理論に依拠し求めるべきではない」と述べる。そして「台湾または台湾人のアイデンティティの問題は、台湾に住み、台湾における自由・民主、繁栄な社会、豊饒な土地からもたらした物質的または精神的な豊かさを享受しながらも、台湾を郷土として認めようとせず、または深奥に認めても、第三者に強烈に主張できるほど郷土愛を持たない多くの人々が存在すること」と指摘している。

エリクソンは、アイデンティティの形成は生涯にわたり、若者も社会も大部分は気づかないとし、その起源は赤ちゃんの自己認識に遡ることができる（西平・中島，2013）と述べる。宮下（1999）は、アイデンティティは青年期の危機を示す用語であり、歴史的・民族的・社会的な一個人の存在全体を示す概念でもあると述べる。

日本社会には、戦前戦後ともに日本以外に文化資

源を有する人々が居住しており、台湾にルーツを持つ人々もその一つのグループである。特に、台湾につながりがある人々は、日本の植民地統治時代の影響やその後の日本との国交断絶の経緯による国籍の喪失などもあり、複雑な問題が潜んでいる。「台湾人」という概念に対しての清河の次の主張がある。それは、「台湾人という言葉は歴史において公式の名称でもなければ、公簿上の表記でもない」し「通称・俗称でもない」、「台湾人という言葉は、地理的な意味と、心情的・文化的な意味の両方を有している」（清河，2007）である。一方で、若林（1997）は「戦前世代の台湾人の『日本語人』」「自分のしたいことをするのが台湾人である」と著書のなかで表現している。

浅野（2004）は、政治と台湾人アイデンティティの高揚についてまとめ、台湾選挙民の自己認識が1992年から2003年12月にかけて変化し、「台湾人である」とする者が11年でおよそ2.5倍となっている一方で、「中国人である」とする者は三分の一以下に減少した」と指摘する。そして、2004年3月20日の台湾の中華民国における選挙結果が、「90年代において一貫して進展してきた、台湾選挙民における台湾アイデンティティの拡大強化の反映であり、台湾は台湾であるとする投票が過半数に及んだことを示している」と述べる。

呉（2007）は、近代の台湾歴史の発展を分析することで、現在の台湾人のアイデンティティとイデオロギーの形成、変容を研究し「台湾政党また台湾人のイデオロギーの変化が起こった原因は、台湾人のアイデンティティの変化という土台に基づいて生み出された」と述べ、台湾人アイデンティティが、歴史上の圧迫された統治によって蓄積され、台湾人イデオロギーも台湾人アイデンティティの成長と同時に培われてきたと指摘する。

渡辺（2007）は、台湾アイデンティティの生成発展と現況について観察し、台湾独立という中台関係の変革に結びつきうるのかについて考察した。それによると、「台湾主体意識と台湾人アイデンティティはもはや当たり前のことになっており、台湾住民に広く受容され、主要な政治勢力はすでにそれに束縛されている」と述べ、「台湾の政治諸勢力は台湾ア

アイデンティティの前提と束縛の下で、より「中味のある」政策提示を有権者から迫られている」と指摘する。

林（2001）は、1987年の戒厳令解除後に引き起こした人々の言語使用の変化と社会的要因について注目した。林は研究のなかで本省人か外省人かを問わず台湾で生まれた二世や三世を全部含めて「新台湾人」と定義し、近年の台湾と中国の今後の関係に関する世論調査結果をもとに、台湾の将来に対する民意の主流だった「現状維持」派が大きく後退し、「台湾独立」支持者が急増したことを例に挙げ「台湾人アイデンティティの変容は新台湾人人口の増加と共に、台湾における人々の言語使用に影響を及ぼす」と述べる。さらに、新台湾人アイデンティティを表明する手段として、国語と閩南語の切り替えが観察されており、切り替えが本省人に限定された台湾人アイデンティティを越え、新台湾人としての共鳴を求めようとしていると指摘した。

林（2003）は、台湾の郷土教育が1990年初め頃の地方政府の母語運動と郷土教材編集に醸成されていた点に注目し、各地の郷土教育が自主的な編纂過程を通じて台湾独自のアイデンティティを提起したことを論証した。そして、「歴史観及び郷土意識の形成が、相互作用によるヘゲモニックなものであった」ことや「歴史観及び郷土意識の形成が、新しいアイデンティティの構築へ向かうもの」であると指摘し、「小地域（家庭、学校、居住地）を中心とする郷土科教育は、「台湾の中に郷土がある」という台湾の主体性を強調し、郷土教育の展開が台湾主体の台湾人アイデンティティの萌芽と人々への浸透を示すものである」と述べる。

ここから、他の移民研究も見ていく。トランスナショナルな日常を生きる日系ブラジル人の若者たちの「居場所」について考察した山ノ内（2014）は、ブラジルにおいて、ブラジル生まれブラジル育ちのミドルクラスの日系人の若者たちは日系社会での認知度の高い日系青年たちのグループの一員となることにより日系人としての肯定的なアイデンティティを獲得していることを明らかにした。藤田（2012）は、米国・英国在住の若者の調査から「新二世」のトランスナショナル・アイデンティティとメディアの役

割について、ディアスポラ的な経験が高い者には電子メディアがトランスナショナル・アイデンティティの構築を促し、電子メディアが同質性を前提とするナショナル・アイデンティティの抑圧から解放され、新しいアイデンティティを創出するための一つの手段となることを明らかにした。張（2005）は、華僑二世、三世および華僑社会へのリターン者のライフ・ヒストリーを通して、ミクロな視点から在日華僑のエスニック境界の規定及びアイデンティティの獲得について考察し、エスニック・アイデンティティの確立・維持には、何らかの形で華僑社会や中国文化との関わりを持つことが極めて重要であると述べている。

以上のように、台湾をめぐる人々の「台湾人」という言葉の解釈やアイデンティティ<sup>2)</sup>を取り巻く課題は政治学や言語使用、郷土教育についての蓄積があるものの、人の生活や人生に注目し台湾人のアイデンティティの変遷を一人の事例を深く掘り下げて明らかにしたものは見当たらず、移民研究においても発展の余地がある。本研究では、幼少期に台湾から日本語未習で来日した経験を持つ人を対象に歴史的構造化サンプリング（Historically Structured Sampling: 以下 HSS）<sup>3)</sup>を行った。日本国は、出入国管理及び難民認定法の改正により1990年前後を境にこうした「日本語指導が必要な児童生徒」（文部科学省 HP 参照）を取り巻く状況は、教育現場のみならず地域社会でも重要な課題となっている。義務教育課程での不登校や友人の不在、学業不振などが理由の学校からのドロップアウト、家庭が理由の高校での退学者の増加など解決できない問題が残されている。本研究では、アイデンティティを自己認識と定義し、複線径路等至性モデリング（Trajectory Equifinality Modeling: 以下 TEM）を用いて分析することで、幼少期に越境する人々が家庭や教育実施機関、地域社会や国家レベルで必要とする支援について検討する。

2) 台湾中央研究院社会学研究所が公開した2015年の調査では、自分について台湾人（73.2%）、台湾人であり中国人（18%）、中国人であり台湾人（4.2%）、中国人（1.6%）、その他（1.8%）、意見無（1.2%）という結果が出ている。

3) HSSとは、複線径路等至性モデリングの重要な概念であり「自分が知ろうと思う経験事象に焦点をあてたサンプリング」（サトウ、2012）である。



## 2. 研究方法

### 2.1 研究デザイン

2013 年秋に予備調査をおこない、質問項目について検討した上で本調査を行った。いずれも日本国内の喫茶店およびファミリーレストランで行った。本研究では、分析方法に複線径路等至性モデリング (TEM) を用いた。TEM はヤーン・ヴァルシナー (Valsiner) の提唱する文化心理学の流れを組む研究方法である。研究方法に TEM を選んだ理由は、アンケート調査や他の質的研究法では、時間の流れを分断し、みたいことの一部しか見ることができないという研究上の限界を乗り越える可能性を秘めているためである<sup>4)</sup>。そこで本研究では、TEM の概念である等至点 (Equifinality Point : EFP), 両極化した等至点 (Polarized Equifinality Point:P-EFP), 分岐点 (Bifurcation Point:BFP) 非可逆的時間 (Irreversible Time), 社会的助勢 (Social Direction), 社会的ガイド (Social Guide), 発生の三層モデル (Three Layers Model of Genesis), 価値変容点 (Value Transformation Moment)<sup>5)</sup> を用いた。

さらに本研究では、サトウの定義になら分岐点分析の一つの試みとして、クローバー分析を採用した。サトウ (2015b) は、クローバー分析について「分岐点において、想像についても拾い、想像力の方向を描く」と述べている。本研究におけるクローバー分析の意味は表 1 に示した。

クローバー分析を進める手順については、市川 (2016) の報告があるが十分ではない。本研究では手順について、次の提案をする。まず、サトウ (2015b) の「想像力の方向」を表 2 に示す。その後、カード化しやすいように、英語でカードの領域に名前をつけた。過去志向促進的想像は、Past Oriented Promotional Imagination (POPI)。過去志向抑制的想像は、Past Oriented Restrain Imagination (PORI)。

4) 語られた内容の他に点線を描き出す意義について (安田, 2012) は、描き出すことに意味があると考えられる径路を積極的に描き出すことにより、生き方に関する考察的提言や援助的介入の可視化につなげることが可能と述べている。

5) TEM の概念については、安田裕子 (2012). 第 1 節 これだけは理解しよう、超基礎概念 安田裕子・サトウ タツヤ (編) TEM でわかる人生の径路-質的研究の新展開 (pp.2 - 3) 誠信書房を参照されたい。

表 1 クローバー分析の意味

過去志向促進的想像	人が非可逆的時間を生きるなかで、分岐点において過去に対する促進的な想像が働いている状態での語りやつぶやき
過去志向抑制的想像	人が非可逆的時間を生きるなかで、分岐点において過去に対する抑制的な想像が働いている状態での語りやつぶやき
未来志向促進的想像	人が非可逆的時間を生きるなかで、分岐点において未来に対する促進的な想像が働いている状態での語りやつぶやき
未来志向抑制的想像	人が非可逆的時間を生きるなかで、分岐点において未来に対する抑制的な想像が働いている状態での語りやつぶやき
中核の想像	人が非可逆的時間を生きるなかで、分岐点において想像が働いている状態での語りやつぶやき (未来や過去に対しては含まない)

表 2 サトウ (2015b) の想像力の方向

過去志向促進的想像 (POPI) Past Oriented Promotional Imagination	未来志向促進的想像 (FOPI) Future Oriented Promotional Imagination
過去志向抑制的想像 (PORI) Past Oriented Restrain Imagination	未来志向抑制的想像 (FORI) Future Oriented Restrain Imagination

サトウ (2015b) 「TEA 研究会」を基に作成、英訳は筆者が追加。

未来志向促進的想像は、Future Oriented Promotional Imagination (FOPI)。未来志向抑制的想像は、Future Oriented Restrain Imagination (FORI)。中核の想像は、Core Imagination (COIM) である。

これらに、中核の想像を追加し「クローバークード」を作成した。

クローバークード (Clover Card) 作成の手順について述べる。クローバーを紙あるいは、パソコンで作成する。紙で作る場合は、文字を書き込めるようスペースを確保する。花びらをつくるのが難しい場合は、正方形や長方形の紙を準備し、二回折り四つ

の次元を作る。クローバー分析は、研究使用だけでなく子どもたちが物語を読む際に時間経過や登場人物の心を読み解く道具としても応用できる。

一つの材料 (同一の文脈) から異なる結果が導かれるプロセ

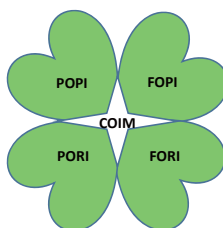


図 1 Clover Card

表3 プロファイル<sup>6)</sup>

	性別	インタビュー時の年齢	両親が教育を受けた国	来日理由	来日時の年齢	帰国回数	インタビュー時の職業
C	女性	40代	日本（父） 台湾（母）	母の再婚	10歳	長期無 短期2・3年に1回	大学院生

スを可視化でき、人間の思考の複線性・多様性を垣間見れる。これまで見落とされてきた子どもたちの想像力や可能性を可視化するツールにもなるだろう。

日本で子ども時代を過ごした中国語圏出身者に対してインタビューによる予備調査を終えた後、2014年3月～2016年5月にかけて本調査を行った。TEM図が完成するまでは、対面でのやり取りを重視した。調査協力者について表3と概略に示した。

#### Cさんの概略

小学校四年で来日。一年間、中国残留孤児の集まる日本語教室で、日本語支援をうける。父親が日本で会社を経営していたため母親はCさんが高校生になるまで専業主婦をしていた。父親と母親が婚姻関係を解消することになり、高校生の頃から生活が苦しくなる。母方の祖父が、日本語教育を受けており、Cさんの母親は子ども時代、家庭の使用言語の一つとして、日本語を話していた。台湾生まれ。漢民族。協力者であるCさんは、来日以降日本名を名乗っており、家族を除いては筆者以外に台湾にルーツがあることを打ち明けたことがない。

## 2.2 データ収集方法

インタビューは、鈴木（2012）を参照し進めた。川上ほか（2014）を参考にしたライフストーリーシートをガイドにしながら調査協力者とともにTEM図を描いた。インタビュー概要を表4に示す。

表4 インタビュー概要

	第1回（2014.3）	第2回（2014.11）	第3回（2016.5） <sup>7)</sup>
時間 <sup>8)</sup>	1時間48分	54分	47分
インタビュー項目	半構造化面接	半構造化面接、その他	その他
	①来日の経緯 ②来日後の生活	①通名・国籍、修正点を尋ねる ②ライフストーリーシートの記入	①TEM図、論文内容の確認 ②修正点を尋ねる

6) プライバシー保護のため、詳細な年齢の記述は控えた。

7) なお、第3回までのインタビュー結果から修正したTEM図や記述についてCさんに2016年11月中旬にメールで確認作業を行い、回答に基づき最終修正を行った。

8) ICレコーダで録音した時間を表記した。

## 2.3 分析方法

インタビューで得られた音声データを文字起こした後、逐次記録を作成。KJ法（川喜田，2009）の手順を経てTEMを用いてモデル化しクローバー分析を行った。一連の作業は、廣瀬（2012）をクローバー分析の分類についてはサトウ（2015b）を参照した。

## 2.4 倫理的配慮

調査協力者に対して、調査内容や音声データの使用方法及び研究協力によって生じる影響などについて事前に説明を行った。協力者の意思を尊重し、プライバシーの保護に努めた。研究内容の公開の際には、事前に確認をとった。

## 3. 結果と考察

本研究におけるTEMの用語と意味について表5、表6に記した。

表5 TEMの用語ならびに本研究における意味

用語と基礎概念	本研究における意味
等至点（EFP） 研究者が関心を持った経験（サトウ，2012）	国際人として生きていく
両極化した等至点（P-EFP）EFPの対極にある点	非国際人として生きていく
分岐点（BFP） 径路が発生・分岐するポイント（安田，2012）	BFP1：いじめを止めさせるため決闘を申し込む BFP2：複雑な家庭環境の友人との出会い BFP3：台湾人であることに蓋をする
価値変容点（VTM） 価値が変わるポイント	私もやればできるんだと実感する
社会的助勢（SD） <sup>9)</sup> 人が何かを行う時に、阻害・抑制的なものとして働く力（安田，2012）	SD1：台湾人帰れと罵声を浴びる SD2：劣等感 SD3：就職・選挙権・ビザ取得の不利益
社会的ガイド（SG） 人が何かを選択して歩みを進めて行く際に働く何らかの援助的な力（安田，2012）	SG1：厳しい父の教育戦略 SG2：大学を出たいという強い思い SG3：具体的な目標 SG4：帰国し就職したいという切実な思い SG5：雑草でも助けが来る

9) 初期は、SD（社会的方向づけ）と訳されていた。本稿は、最新の表記で示す。

表6 本研究における三層の捉え方 (TLMG)

最上層	信念・価値観レベル	私に対する意味づけの変容
中間層	促進的記号のレベル	高校での概念の習得
最下層	個別活動レベル	自信への道のり

## 結果

本研究では、Cさんの語りを四つの区分にわけ、結果と考察を示す。

### TEMによるモデル作成

Cさんの語りを基にTEM図を作成した。作成した図は図2、図3に示した。なお、等至点は□で表し、語りから実際に得られた径路は→で表した。また、理論的に仮定される径路は…→で、Cさんの語りは「 」で、筆者が命名したカテゴリー名は【 】で記入し、中略部分は……で示した。文中の(C1からC32)は筆者がつけた発話番号である。クローバー分析の該当部分は、< >で記し概念(FOPI, FORI, POPI, PORI, COIM)を付け、図4に示した。( )は、筆者が補足した。

#### 1) 来日から中学まで

Cさんは、台湾で生まれ10歳までを過ごし【母の再婚で来日する】。台湾は2学期制で日本は三学期制なので、日本に来たのは小学校四年の三学期だった。【日本語ゼロで来日】したため、父が探した日本語教室へ通い【残留孤児の孫と日本語を勉強する】。先生は当時2名いて、二人とも【華僑の先生】だった。一年生の教科書を使い教えてもらった。「とんだーとんだー赤い風船がとんだーっていうのが、最初のセンテンス」と当時を振り返る。

残留孤児の孫とは、「北京語で話したり一緒に遊んで」楽しい日々を送った。日本語教室で友だちができて楽しい時間を過ごす傍ら、SD1【台湾人帰れと罵声を浴びる】ようになる。

一年間残留孤児の孫の通う日本語教室に通ったのうち、家庭の事情でT(都道府県名)に来てからは、「全て日本人で……五年生のときは友人もいなくて、とっても寂しかった……

学校にいてもほぼ誰も、誰とも話さずに一日が

終わる生活がずっと」(C1)。家庭の事情で【日本語支援が受けられない学校に転校】し、転校先でも罵声を浴びる日々が続いた。

「学校行くと台湾人帰れ帰れのばっせい(罵声)を浴びながらいつも常時浴びて……<このままじゃ私ここで生きていけないなあとと思って>(FORI1)、決闘を申し込んで忘れもしないEちゃん……裕福なお家の方で、いつもとにかく台湾帰れ台湾人バーカバーカって……四六時中なぜか休み時間になるとそういうばっせい(罵声)がひどくて、決闘を申し込んで……向こうは子分十何人ぐらい連れてきたけど私は箒を片手に、戦いは女の子だからしなかったけど、私もありたけの(ありったけの)その日本語で……<こんなんじゃやっていけないここ(で)生きていけないなって思って>(FORI2)……それからはいじめピタッとなくなって」(C2)

転校先の学校で、BFP1【いじめを止めさせるため決闘を申し込む】といじめがなくなった。その頃【担任教師から温かいサポート】を受け、日記を書き、【自己表出】する場を得る。小学校六年になると、【情熱的な教師】が担任になった。

「なんでもいいから、万事においてはビリでもいいから、これだけは人には負けないぞという自信を持ちなさい」(C3)と担任教師から【自信を持つこと】を学ぶ。小学校中学校では、日本語支援者や国際教室などの学ぶ場がないまま過ごした。そうしたなかで、家庭で日本人の父親が熱心に日本語の指導をしてくれた。

「テストペーパーが帰ってくると、いつも父は非常に熱心に……その時は苦痛でたまらなかった……テストが返ってくると、一問ずつ解説を加えながら、でもわからないんです……結局基礎の掛け算も割り算もその前の足し算も引き算もできないと駄目……わからないのにずーっと延々と解説」(C4)このように、学校や地域社会での日本語のサポートの不在を【父の熱心な教育戦略】で補っていた。家庭では、日本語の使用のみ許され、中国語を話したり中国語の本を読むことが禁止された。

「家庭では父とは日本語……兄弟たちとも日本語で、兄弟たちは話せないから、で母とは中国語と台湾語で話していましたが、ただ父がいると中国語で



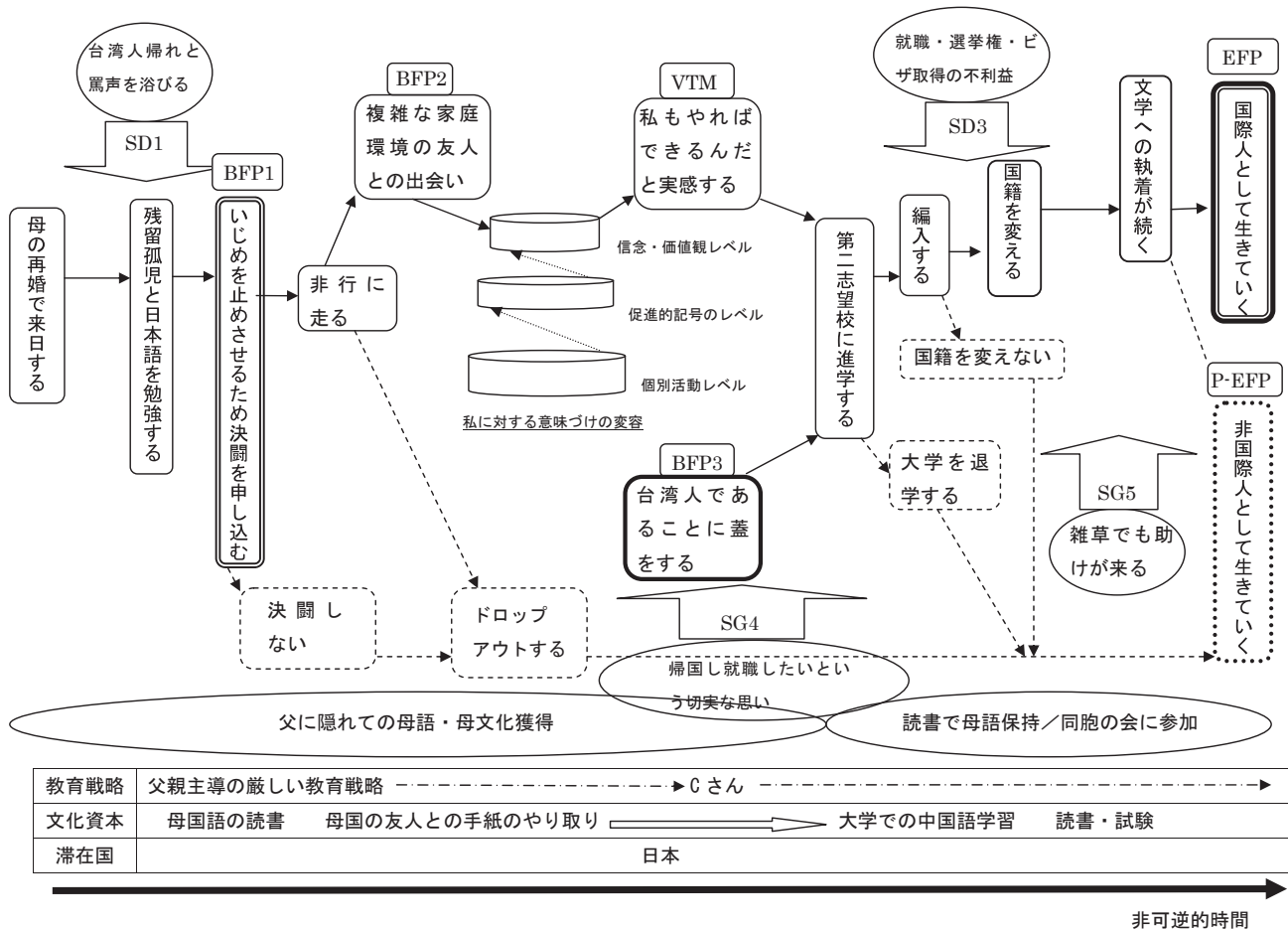


図2 Cさんのライフストーリーの径路

話すといい顔しないので……くあからさまには言いません……母と中国語・台湾語を話す時は、父はもう露骨に嫌な顔していましたし……極端に言えば、日本人で生きていくんだからもうそんなのは必要ない> (FORI3)」(C5) という【同化主義的】な家庭環境だった。そのような環境で【父の目を盗んで中国語の読書】をし、中国語力をキープする日々が続いた。

「当時父はすごく私の日本語の勉強をしてくれて心配してくれて、周りについていけないと……家で中国語を話すことも止められたり、母はすごく読書が好きで家にも中国語の本がいっぱいあったのですが……読んではいけなかったんです……すごいなんか隠れて……お風呂入りなさいって言われて、でそれをバスタオルにくるんで……とにかく隠れて読むような感じ……中国語をキープしていく上で読書がすごくよかった」(C6)

台湾の友だちと【書簡を通して母語保持】をおこない、精神面で友だちから励まされ苦しみが文通を

通して打ち明けられたのも助けられたことだった。一方で、中学に入学すると、【非行に走る】ことになる。

「中学一年生で、寒くてもコートとかセーターを一切着ちゃいけない……中学三年生じゃないとダメよって、それはおかしいと思って、わたし着ていたら、それからもう大変。休み時間になると、ちょっとN(Cさんの日本名)ツラかせて言われて、……先輩の呼び出しがすごくて、そこから(そこから)ちょっとおかしく」(C7) になった。

「人をいじめるとか卑怯なことはしません。どちらかといえば、自爆型。授業に出ないで遊びに行っちゃうとか」(C8)

中1の終わりから不良になったことで、【学級委員に任命】される。

「その先生は私に学級委員になりなさいと、いつも目を光らせ、決して言葉は口数は多くないんです……(学級会の時は)学級委員が議題を決めていいんです……今日はランチについて話し合いますよ

か、といった時はみんなひいていました」(C9)

非行に走る傍ら、中学では【美術部に入部】し、好きな絵に打ち込んだ。

高校受験は、家庭の事情で確実に合格するレベルの学校を探して受験先を決めた。

「県立だったらオッケーだよっていう条件で……県立一校だけ受けたんです……スリルっていうか……<落ちたらどうしようっていうプレッシャーが非常に大きくて> (FORI4) ……今でも忘れられません」(C10) と振り返る。

## 2) 高校の三年間

中学を卒業し、高校に入学したCさんは、部活と学業に打ち込むようになった。

「中学は美術部で……<高校は和菓子が食べたくて> (FOPI1), 茶道部に入りました。<浴衣とかも着てすご楽しかった> (POPI1)」(C11) と語る。そして、BFP2【複雑な家庭環境の友人との出会い】をする。

「高校は、T県立」高校っていう偏差値が50あるかないかっていう……<私はこれまで自分の家庭事情にコンプレックスを抱いて……劣等感とか……あったんです> (PORI1)」(C12) とSD2【劣等感】があったことを語る。

次に、Cさんのライフストーリーにおける【私に対する意味づけの変容】について、TLMG（発生の三層モデル）の三層に分けてみていく（図3参照）。TLMGは、分岐点における「自己のモデル」である。分岐点においては、新しい促進的記号が発生していると考えられており、促進的記号の発生が人を新しい選択肢へと誘う（サトウ, 2015a）。

### 私に対する意味づけの変容（TLMG）

はじめに「個別活動レベル」である【自信への道のり】について述べる。

これまでCさんは、SG1【厳しい父の教育戦略】とSG2【大学を出たいという強い思い】が根底にあった。高校に入り、BFP2【複雑な家庭環境の友人との出会い】で【みんな一生懸命生きている】ことに気づく。【自分は特別じゃないんだ】と知ることになる。そこで、【自分は一人ではない】と実感する。

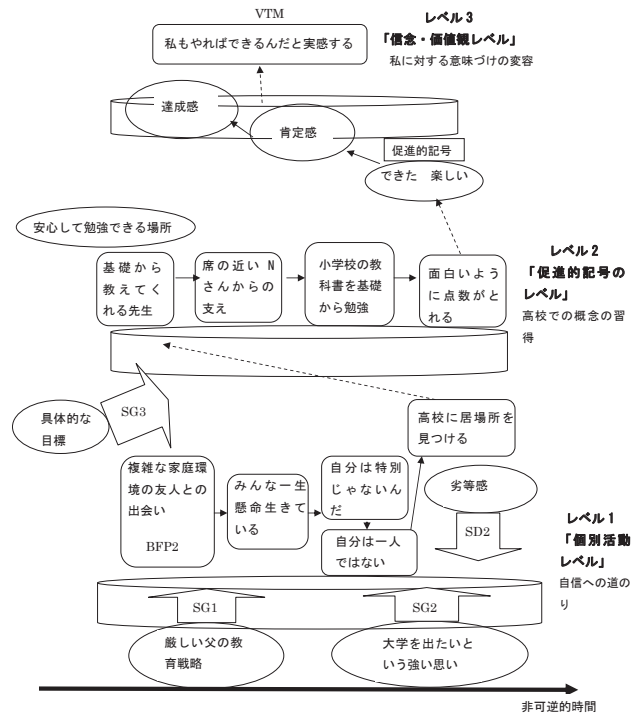


図3 私に対する意味づけの変容

SD2【劣等感】をこれまで持っていたが、【高校に居場所を見つける】ことにつながる。

次に、「促進的記号のレベル」である【高校での概念の習得】ならびに「信念・価値観レベル」である【私に対する意味づけの変容】について述べる。

居場所を見つけ高校が【安心して勉強できる場所】となり、学校では、【基礎から教えてくれる先生】と【席の近いNさんからの支え】で、わからなかった問題が理解できるようになる。自宅では、Cさん自身が【小学校の教科書を基礎から勉強】し、努力を重ねるうちに、【面白いように点数がとれる】ようになる。そこで、促進的記号【できた・楽しい】という感情が生じ、【肯定感】や【達成感】につながり、VTM【私もやれば出来るんだと実感する】に至る。

「達成感なんでしょうね、人って一つできると、またなんか違う世界見てみたい、なんかそういう達成感が大きかった」(C13) と当時を振り返る。しかし、高校で友だちや先生に恵まれても【日本に馴染めず】台湾に帰りたいたいと思いを秘めて日々を過ごしていた。

「<ずーっと台湾に帰りたいたい> (FOPI2) 家庭にも日本にもあんまり馴染むことはできなくて、とに



かく台湾に帰ることが唯一の希望……<やっぱりなんかこう馴染めない> (FORI5) ……<自分にとって住む住み家は台湾の方がもっと自分は伸びやかに生きられる感じがして……中国語をなんとか忘れまい> (FOPI3)」(C14) としていた。

この頃、花屋でアルバイトをしていたCさんはBFP3【台湾人であることに蓋をする】体験をした。「あるとき男性社員がやってきた時に、なんかまたまた母がその餃子を差し入れをしてくれて、で、あの一、みんなでこうワイワイこう、おばちゃんたちと食べてたところにその社員がこんにちはーってやって来て……この子のお母さんは、台湾の出身で、すごく餃子美味しいから……一緒に食べましょうよって言ったところ、<中年の男性が、あっ台湾人だったんだってお母さん売春婦してた(と言った)……公衆の面前で、自分が裸にされたぐらいの衝撃を受けて> (PORI2), それ以来ちょっともう<台湾人であるっていうことを……言わない方が、嫌な目に合わずに済むのかなあって> (FORI6) ……台湾人というだけで、やな(嫌な)想いをするんだったら、場合によっては言わないほうがいいんじゃないのって言われたりして……<それで来てしまって……なんとなく引きずって、ちょっと自分のなかで、こう胸を張ってプライドを持って、肯定できないっていうのも否めない事実> (PORI3)」(C15) となった。

大学受験を控え、成績を心配した父が家庭教師をお願いし、その先生から母語の大切さと中国語学習の大切さに触れる。

「大学は家庭教師の先生……私の成績を心配した父が家庭教師をお願いしてくれて……外国語の習得っていうのはとても大変なことで、母国語だし忘れないようにしてねって……先生私は勉強もよくできなくて、中国語を活かして将来仕事に活かしたいんですっていうことを言ったら……T大っていう大学があるから……中国語とか勉強できるよって言われて……<T大だけしっかりインプットして、偏差値度外視で> (FOPI4)」(C16)

家庭教師の先生との出会いにより新しい目標ができた。

### 3) 大学入学から 20 代半ば

大学受験に挑戦したものの、一年目は合格が叶わず、【第二志望校に進学する】。

「ただ案の上やはり一年目はあの一落ちてしまって、でA大学に入りまして……両親が離婚することになってしまって……経済的にもちょっともう厳しいということで大学を辞めてくれないかということで、言われて……<唯一の希望が台湾に帰ることだったんです> (FOPI5)。で、ただ<台湾帰るのに……やっぱり大学ぐらいは出てないと自分でちょっと……自立して自活をしていくのにはやっぱり学校を出ないと……厳しいんじゃないかなーってというのが……思っていて> (FORI7), ……<何がなんでも大学は出たいってという思いが非常に強かった> (FOPI6) ……<どうしようかなって思っていたところ> (COIM1) に……A大学で、たまたまお会いした先生が……編入学もあるんだよ……もう一回チャレンジしてみたら(と)、アドバイスをしてくださって……タイミングよく……編入学の話を聞いてなので……入学直後から、また編入学に向けて猛勉強を始めて……T大に編入学で受かった」(C17) と当時を振り返る。

Cさんは、【編入する】ことで勉強をやめずに済んだ。台湾に帰るために第一志望に掲げていた大学に編入し、好きな語学の勉強に打ち込み、家庭教師をしながら学費を稼ぎ学生生活を過ごした。大学卒業後、社会人一年目で今の夫<sup>10)</sup>と結婚した。25歳でSD3【就職・選挙権・ビザ取得の不利益】のため、【国籍を変える】ことになる。

「25歳からそうですね帰化いたしまして日本国籍です……(日本籍に変えた)理由は、実際のところやはり非常な不便が伴います。例えば就職の時もそのちょっと明言はされませんでしたけど、ちょっと国籍がネックになっていたこともあったり、または旅行の時のビザの取得が非常に面倒で、煩わしさを伴っていたので、であとは選挙権など……父の配慮で永住権というのは日本に来て早々と取得してくれたのですが……<ただやっぱりその国籍が日本でまあ住むのにやっぱりないと非常に不便だということ

10) 夫は、日本人である。Cさんは、来日後永住許可申請をしており25歳で日本国籍を取得した。

で……帰化を決心しました> (FOPI7)」(C18) と振り返る。

#### 4) 20代後半から現在

Cさんは、国籍を変えた後も生い立ちがコンプレックスで今日まで過ごしている。

「<家庭環境、台湾にいる頃もいろいろとありまして> (PORI4)、母も波乱万丈な人生を歩んできて……<生い立ちのコンプレックスというのが、長年の私の課題> (PORI5)」(C19) と語り、「<台湾人ということを伏せて……自分の生い立ちと結びつけて生い立ちのコンプレックスと台湾人であることが……コンプレックスであるというのが劣等感の諸悪の根源であった> (PORI6)」(C20) と自覚している。

Cさんは【失った自己を取り戻す】過程において、自分の【ルーツを知るための手段】の一つとして【文学への執着が続く】。

「<日本にいたからこそ中国文学を(に)対して、台湾文学(に)対してすごい執着があるのかもしれない> (FOPI8)。もし、<そのまま台湾にとどまって住んでいたら、ここまでなんかあのやろうかなって思わないかもしれないですね> (PORI7)。<日本に行ってからこそ……自分のルーツをもっと知りたいという渴望にも似たような熱い気持ちがあるから、こういう道(文学に執着)に進んだのかもしれない> (FOPI9)。<日本に来てなかったらやってなかった> (POPI2)」(C21) と語る。

ここに至るまでの道は平坦ではなく、文学に没頭するまでは、読書で語学力を維持して、過ごした。「主に読書が中心なんですけどもそれでなんとか語学力をキープしつつ……文章を読むことに関してはとにかく読書が大好きだったので、語学力というか趣味を、大好きだったので、読んだり読む力っていうのはほぼ衰えていません」(C22) とこれまでの努力を語る。そして、中国文学・台湾文学の探求を通してアイデンティティを取り戻す過程を振り返る。

「<葛藤も抱えながら今日まで生きてきて……アイデンティティに背を向けるべきなのか> (PORI8) ……<中国文学とか哲学とかそういう熱愛はずーっと抱き続けて> (FOPI10)」(C23) と語る一方で否

定する自己の存在に気づいている。

幼い時に来日したことで中国とは何かと言われた時にわからないことが多い。母が読書が好きで、家庭に本があったが、父に中国語を禁止され、独学する以外に中国や台湾について「知る手だてがなかった」(C24) と回想する。

「<歳を重ねるにつれ、私はこのままだと根なし草になってしまうような気がして> (FORI8) ……<いつも壁にぶつかる……運命に対して一体どんな解釈しているの……何を根本にたててこの世界を認識しているの……疑問がいつも> (COIM2)」(C25)

「台湾の原住民の女性だったら例えばその生に対して非常にまたオープンな考えで、嫁ぐんではなくって、<未亡人になったら今度は男の人を婿に入れるぐらいのそういうなんか様々な生き方っていうか、現実もあったりして> (FOPI11)、だからやっぱりそういうのをずっと読むとどうしても<トラディショナルな、思想というかそういうのがわからなくて> (COIM3)」(C26)

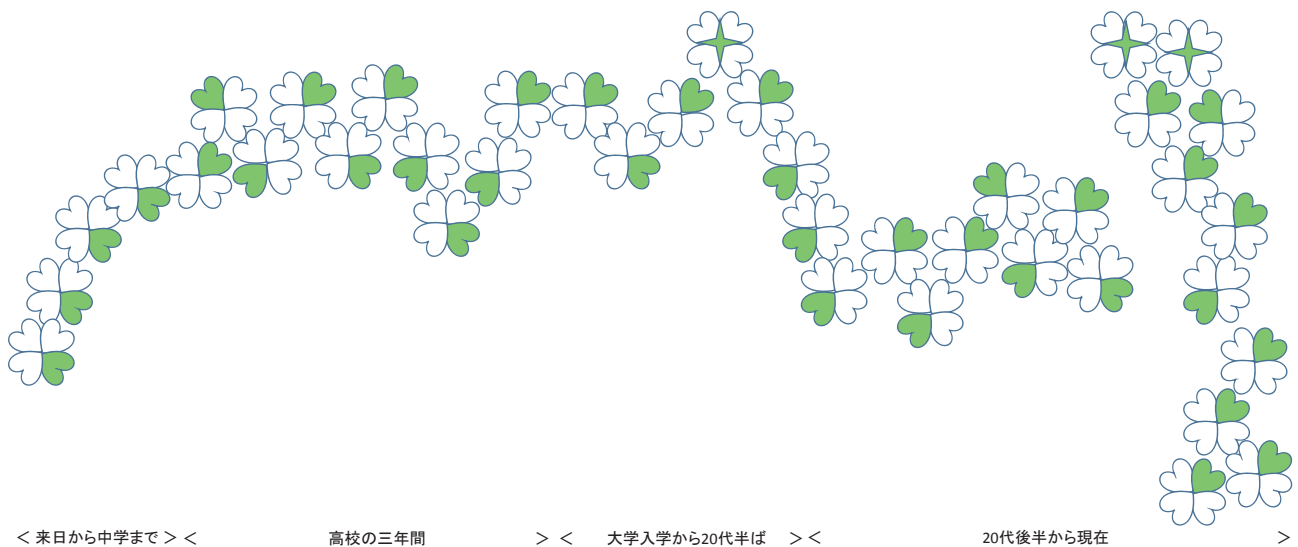
Cさんは、葛藤を抱えて生きてきたことに気づき、根無し草になる危機感を持ち文学を通して、自分の運命を探求する。そうして探している過程で、【台湾人であることを自覚する】ことがあった。

「<自分を支えてくれたのは、台湾の古くからある諺で、一枝草一点露<sup>11)</sup> ……雑草というのはほんとにみんなに踏まれて取るに足らないぐらいの存在です……そんな雑草の上にも必ず天からの、恵みが施されるっていう、だからそんなに、あんま悩まなくていいんだよっていう、必ず何かしらの助けがくるから、あなたに必要なだけの助けがくるからってこと> (FOPI12) で、これに支えられた時はあっやっぱり台湾人だなんて思いますし、これはうちの祖母がよく口にしていた言葉……私が小学生ぐらいの頃から祖母も……波乱の多い人生で、<その時に自分を慰めるようにこれを言っていた> (POPI3) のが……覚えています」(C27)

SG5【雑草でも助けが来る】という祖母の言葉を思い出す。

長年望んでいた台湾に帰ることは就職と結婚により実現しなかった。

11) 一枝草一点露 (yizhicaoyidianlu) 台湾の諺。

図4 Cさんの想像力の方角<sup>12)</sup>

「日本は異質なものというのを排除したが、排除っていうよりももしかしたら不安を感じる……異質なもの。みんな同じレールの上で歩かないとなんか、はみ出る人は目立ってしまうよって感じで。……台湾は大らかで、多少むしろ人との違いを……あなたならではの特色を出してっていう、いかに自分をアピールしていくことを尊く（と）いう傾向があるかもしれません」（C28）と台湾を懐かしむ。

「帰国しようと思っていたので……<台湾で生きていこうと、帰って生きていこう>（FOPI13）と、<小さい時は家庭の事情で不本意ながらやって来たけれど>（PORI9）、帰国後は、<卒業したら台湾に帰ろうって思っていました>（FOPI14）……（大学）卒業ぐらいまでは台湾人」（C29）だと思っていたと語り、現在はEFP【国際人として生きていく】と言及する。

「<強いていえば国際人>（FOPI15）……国際人というからには英語を話せないんですが、でも、わからないですね。それはまたいでいるから。どちらかの文化とかどちらかの言語の一つで考えるのではなく、ある時は日本語で考えるし、ある時はあの中国語とか台湾語で出てきます」（C30）

これからの夢は、母国文学の探求と語り、住み家は日本であるが、基盤は台湾と語る。

「アジトはもう日本にします。アジトというか本拠地は、本拠地は日本にして、でも日本寒いから、

寒い時期はちょっとあったかい台湾とかに、でもいずれにしても根を下ろすのは日本だと思います……<台湾は生みの親で、台湾とか台湾語、中国語は生みの親で、日本は育ての親って感じですね>（FOPI16）」（C31）

二つの国を生みの親、育ての親で規定し、自己を起点につながりを見極めている。

現在のCさんは、出自となる文学について大学で学び、失った時間を取り戻している。自分を「<アゲアゲですね>（FOPI17）」（C32）と人生で最も充実した時期であると語った。

#### クローバー分析

図4から、いくつもの想像力が示された。来日から中学までは、未来志向抑制的の想像が続く。その後、高校入学を機に、未来志向促進的の想像が出現し過去志向促進的の想像や過去志向抑制的の想像とをいったりきたりしながら、三つの中核の想像を超えて、現在の未来志向促進的の想像の爆発的出現に至る。Cさんにとって「来日」から現在までの経験は、マジョリティの言葉から自己の言葉の獲得へと変容する経路でもあり、非可逆的時間のなかで言葉の獲得と想像力の関係をクローバー分析から垣間見ることができらるだろう。

12) 緑の葉の部分にFOPI, FORI, POPI, PORIそれぞれの該当部分でありCOIMは中央をフォーカスした。



## 考察

本研究では、小学校四年で来日し、中学高校大学と日本で過ごし、社会人二年目に日本国籍を取得したCさんのライフストーリーの径路を視覚化した。【母の再婚で来日する】ことになったCさんは、不本意ながら来日し【残留孤児と日本語を勉強する】日々を送るが、学校では、SD1【台湾人帰れと罵声を浴びる】。BFP1【いじめを止めさせるため決闘を申し込む】といじめは終わった。その後、中学に入り【非行に走る】が、教師がCさんを見捨てずに学級委員に任命し、責任ある立場にたたせたことで更生する。ここには、教師からの適切なサポートがあった。岡村（2013）の「個々の能力や状況をきちんと把握し、それに見合ったサポート」を教師がおこなったと考えられる。この時期を境に学級内での役割意識が芽生え、不良から受験に目を向けることにつながったと考えられる。

卒業後入学した高校でBFP2【複雑な家庭環境の友人との出会い】があり、TLMG【私に対する意味づけの変容】がおこり、VTM【私もやればできるんだと実感する】。自分と同じ立場の同級生との出会いで、孤独感を感じずに居場所を見つけたことが推察できる。その頃、BFP3【台湾人であることに蓋をする】出来事が起きる。家庭教師の先生から母語を大切に励まされ受験勉強を続けるが、願いが叶わず一年目は【第二志望校に進学する】。両親の離婚が影響し大学中退の危機に陥るが、【編入する】ことで窮地を乗り越えた。教師からの助言が学費の安い大学への編入を成功させた。適切な情報を与えてくれる助言者の存在が、カギとなることが窺える。

高校時代にアルバイト先で人間としての尊厳が傷つけられる体験をしながらも、勉強に励めたのは、母語を認めてくれる家庭教師の先生からの言葉に加え、台湾にSG4【帰国し就職したいという切実な思い】が支えとなっていたことが窺える。結婚後、SD3【就職・選挙権・ビザ取得の不利益】が理由で、【国籍を変える】ことになる。結婚した一年目と二年目に関しての語りから日本社会で生きる際に不利益が生じるという仕方のない理由で、日本国籍に変えたCさんの、国籍を変えたくなかったという本音（C18

参照）が窺われる。

読書で語学力の維持を続けるものの、【文学への執着が続く】。その後、再び大学に入学し、文学に打ち込む生活を送る。子どもの頃、祖母に言われたSG5【雑草でも助けが来る】という言葉が支えとなり、EFP【国際人として生きていく】に至る。大学に入学し、母国文学を通して伝統を知り、日本社会での自分や今後の生き方について見つめ直し（C20参照）、高校以来台湾人であることに蓋をしてきた、Cさんのアイデンティティの危機がようやく回復に向かう様相（C30, C31, C32参照）が明らかになったといえるであろう。

## 結論と今後の課題

本研究は戒厳令が解除される前の台湾で幼少期を過ごし来日した一人の台湾人女性の事例を深く掘り下げたものである。日本国内の外国人散在地域で生活し苦勞したCさんの事例は、台湾に限らず日本国以外にルーツを持つ人々に対する教育や支援の必要性を示唆した。張（2005）や山ノ内（2014）は、文化やアイデンティティを表出できる「居場所」の重要性を指摘している。Cさんは、最近になって「同胞の会」に参加しているが、幼少期はそのような空間はなかったという。日本の学校や地域日本語教室などにはそうした場所が作られているところもあるが、外国人散在地域で気軽にアクセスできる「居場所」を作っていくことが課題といえよう。藤田（2012）が指摘する電子メディアがトランスナショナル・アイデンティティの構築を促すという主張から見れば今年度の「テレビで中国語」（NHKEテレ）は多様な文化背景をもつ出演者が登場し、中国語教育を発信している。「言葉」や「言葉の教育」は誰のものかとメッセージを感じとれる。アイデンティティの危機は台湾人に固有のことではなく文化や言語が異なる移動を伴う人々の間では存在するだろう。彼ら／彼女らの発達に寄り添うような教育や支援、政策の構築に向けて、林（2003）が触れた台湾の郷土教育の取り組みと発展の歴史は、ヒントを与えるものである。

## 謝辞

本研究にご協力くださったCさんに心からの感謝の意を表します。修士論文をご指導くださいました横浜国立大学の橋本ゆかり教授、TEA/TEMを学び続けるきっかけをくださいました立命館大学のサトウタツヤ教授、安田裕子准教授、貴重なご意見をくださった査読者の二名の先生、台湾について講義を通してご教授くださいました一橋大学の星名宏修教授はじめ言語社会研究科の皆様に深く感謝致します。

## 引用文献

- 浅野和生(2004). 陳水扁総統の再選と台湾人アイデンティティの高揚 問題と研究, 33, 41-61.
- 市川章子 (2016). ① TEA ワークショップ-分岐点分析の意義と「クローバー分析」の考え方- 日本質的心理学会 第13回大会 2016年9月24日 名古屋市立大学 質的研究法ワークショップ 配布レジュメ, 未刊行
- エリク・H・エリクソン著/西平直・中島由恵訳 (2013). アイデンティティとライフサイクル 誠信書房
- 岡村佳代 (2013). 第5章 外国につながる子どもたちの困難・サポート・対処行動からみる現状 加賀美常美代 (編) 多文化共生論 多様性理解のためのヒントとレッスン (pp.101-123) 明石書店
- 川上郁雄・尾関史・太田裕子 (2014). 日本語を学ぶ/複言語で育つ-子どものことばを考えるワークブック (pp.69, 75) くろしお出版
- 川喜田二郎 (2009). 発想法 第84版 中央公論新社
- 清河雅孝 (2007). 日本における台湾人の国籍表記に関する法的問題-台湾人のアイデンティティの確立を中心として- 産大法学, 40, 157-176.
- 呉瑞豪 (2007). 台湾人アイデンティティの形成と変容過程 国士館大学大学院政経論集, 10, 1-34.
- サトウタツヤ (2012). 第2節 質的研究をする私になる 安田裕子・サトウタツヤ (編) TEMでわかる人生の径路-質的研究の新展開 (pp.4-11) 誠信書房
- サトウタツヤ (2015a). 1-1 複線径路等至性アプローチ (TEA) 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編) TEA理論編複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ (pp.4-8) 新曜社
- サトウタツヤ (2015b). TEA研究会 配布レジュメ (2015年9月3日), 未刊行
- 鈴木淳子 (2012). 調査的面接の技法 [第2版] 第6刷 ナカニシヤ出版
- 垂水千恵 (1992). 周金波論: 日本統治下の台湾に於ける日本語文学論 I 日本文学, 41, 65-72.
- 張玉玲 (2005). ミクロな視点から見る在日華僑のアイデンティティの形成過程-二世, 三世および「リターン者」のライフ・ヒストリーを通して- 国立民族学博物館研究報告, 30 (1), 57-91.
- 林初梅 (2003). 1990年代台湾の郷土教育の成立とその展開: 台湾人アイデンティティの再構築過程の一断面 東洋文化研究, 5, 91-119.
- 林欣儀 (2001). 社会的変化から見る台湾での言語使用-「国語」と閩南語の使用を中心として 天理台湾学会年報, 10, 109-119.
- 廣瀬眞理子 (2012). 1-2 ひきこもり親の会が自助グループとして安定するまで 安田裕子・サトウタツヤ (編) TEMでわかる人生の径路-質的研究の新展開 (pp.71-87) 誠信書房
- 藤井省三 (2011). 中国語圏文学史 東京大学出版会
- 藤田結子 (2012). 「新二世」のトランスナショナル・アイデンティティとメディアの役割-米国・英国在住の若者の調査から- アジア太平洋研究, 37, 17-30.
- 宮下一博 (1999). アイデンティティ identity 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榊算男・立花政夫・箱田裕司 (編) 心理学辞典 (pp.4-5) 有斐閣
- 安田裕子 (2012). 第1節 これだけは理解しよう, 超基礎概念 安田裕子・サトウタツヤ (編) TEMでわかる人生の径路-質的研究の新展開 (pp.2-3) 誠信書房
- 安田裕子 (2012). 第5節 9±2人を対象とする研究による等至点の定め方と径路の類型化 安田裕子・サトウタツヤ (編) TEMでわかる人生の径路-質的研究の新展開 (pp.32-47) 誠信書房
- 山ノ内裕子 (2014). トランスナショナルな「居場所」における文化とアイデンティティ-日系ブラジル人の事例から- 異文化間教育, 40, 34-52.
- 若林正丈 (1997). 台湾の台湾語人・中国語人・日本語人 台湾人の夢と現実 朝日新聞社
- 渡辺剛 (2007). 台湾人アイデンティティと中台関係-台湾人は独立を選択するのか? (特集迷走する台湾) 東亜, 477, 10-17.
- 台湾中央研究院 社会学研究所「圖片:T6.36 對自己的稱呼那一项最適合」  
<<http://www.ios.sinica.edu.tw/TSCpedia/index.php/%E5%B0%8D%E8%87%AA%E5%B7%B1%E7%9A%84%E7%A8%B1%E5%91%BC%E9%82%A3%E4%B8%80%E9%A0%85%E6%9C%80%E9%81%A9%E5%90%88%EF%BC%9F>> (2017年5月1日)
- テレビで中国語 Eテレ NHK ゴガク  
<<https://www2.nhk.or.jp/gogaku/chinese/tv/>> (2017年5月1日)
- 文部科学省「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査 (平成26年度)」の結果について <[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/27/04/\\_icsFiles/afieldfile/2015/06/26/1357044\\_01\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/04/_icsFiles/afieldfile/2015/06/26/1357044_01_1.pdf)> (2017年5月)

月1日)

(2016. 11. 17 受稿) (2017. 5. 10 受理)  
(ホームページ掲載 2017年6月)